

Ocean Breeze

Newsletter of the Atmosphere and Ocean Research Institute
The University of Tokyo

2012

夏

第9号

CONTENTS

- 02 **特集**
**大槌の復興から
世界へひろがる海洋研究**
「東北マリンサイエンス拠点」づくりに向けて
- 05 大槌レポート⑤ **生物資源再生分野の新設**
- 06 **世界とむすぶ大気海洋科学①**
ハワイ大学との合同シンポジウム
- 11 AORI スタッフ日誌⑧ **事務部 海洋アライアンス**
- 12 From Alumni⑦ **今も昔も鳥濱けの日々です**



2012年 6月15日、ハワイ大学の所有する小島ココナツアイランドにて。
瀧田 忠彦 撮影

大槌の復興から世界へひろがる 海洋研究

「東北マリンサイエンス拠点」づくりに向けて

木暮 一啓 海洋生態系動態部門 教授、副所長

2012年1月から文部科学省の支援を受けて東北マリンサイエンス拠点形成事業が始まりました。この事業は東北大学、独立行政法人海洋研究開発機構と東京大学大気海洋研究所が連携し、10年間にわたって地震と津波で被害を受けた東北沿岸域の科学的な調査を行い、それを通じて、地域の漁業の復興へのお手伝いをしていこうとするものです。東京大学大気海洋研究所は大槌の国際沿岸海洋研究センターを拠点として観測・研究を行うとともに、そこを地域さらには世界に開かれた新たな海洋研究の場として作り上げていくことを目指しています。



イラスト / 渡部 寿賀子(東北マリンサイエンス)

東北マリンサイエンス拠点形成事業の概要

「東北マリンサイエンス拠点」形成事業は、東北大学を代表機関とし、これに大気海洋研究所と(独)海洋研究開発機構を加えた3機関が連携を保ちながら推進します。東北大学は宮城県女川の同大農学部、複合生態フィールド教育研究センターを拠点にしながら漁場環境の解析に焦点をあてるのに対し、海洋研究開発機構は同機構の船舶を用いて沖合および底層環境に重点を置きながら事業を推進する予定です。

これに対し、大気海洋研究所は岩手県大槌町の国際沿岸海洋研究センターを拠点とし、淡青丸およびその後継船を使って湾内から沖合までの海洋生態系を総合的に解析していく予定です。解析結果を地域の方々に公表するとともに、その要望を伺いながら大学と社会との新たな連携を築いて行きます。



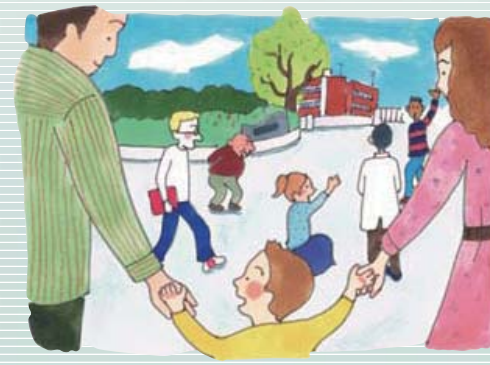
海の中は？

2011年3月の震災のあと、海の中はどうなっているのでしょうか。また、今後はどうなっていくのでしょうか。私たちは海にモニタリング機器を設置するとともに、研究船や潜水作業などによる観測を多角的に組み合わせ、最新の観測手法と分析技術を駆使してそれを解明して行きます。



魚が増えるしくみは？

三陸の地は長く漁業で栄えてきました。では、なぜこの海域には魚が豊富なのでしょう。それを知るには物理学、化学、生物学の専門家の力を結集した研究が必要です。私たちは大槌周辺域の魚が増えるしくみの解明を通じて、地域の漁業のお手伝いをしていきたいと考えています。



国際沿岸海洋研究センターは？

大槌の地に東京大学大気海洋研究所の沿岸センターが建ってから、2013年で40年経ちます。私たちは一刻も早く沿岸センターを大槌の地に復興させたいと強く希望しています。そこを地域の方々にも開かれた新たな場としていくのはもちろんのこと、さらに国際的な研究拠点として世界から研究者が集まる場ともする予定です。



「東北マリンサイエンス拠点」形成事業はなにを目指すの？

沿岸センターを国際研究拠点として復興させ、海を知り、魚が増えるしくみを知り、それを地域の方々にわかりやすく伝えることを目指しています。大気海洋研究所は、全国16の大学と2つの水産試験研究機関から160名以上の研究者、大学院学生の力を結集してこの事業を推進します。



東京大学大気海洋研究所の研究課題

大気海洋研究所は「海洋生態系変動メカニズムの解明」という課題でこの事業に取り組みます。これは大槌湾から外洋域に広がる水界生態系を主な対象にし、全国から物理、化学、生物、モデルの専門家を結集し、地元のニーズを組み上げながら学際的な研究を進めるものです。このためには、大槌町の

国際沿岸海洋研究センターを一刻も早く復興させるとともに、そこを地域の方々との新たな接点の場として構築していく必要があります。

具体的な研究課題と代表者は以下のとおりです。



1. 沿岸広域連続モニタリングシステムと海洋分析センターの構築 代表：津田 敦

大槌湾およびその周辺海域の海洋環境を恒常的にモニタリングし、それをリアルタイムで集約するシステムを作るとともに、この事業で得られた各種試料を統一した方法で高感度で分析するためのセンターを設置します。

2. 地震・津波による生態系攪乱とその後の回復過程に関する研究 代表：河村 知彦

地震と津波はその規模や海岸地形に応じた海洋生態系の攪乱を招くとともに、そこに生息する生物群に対してもその分布、習性、行動様式などに応じて様々な影響を及ぼしたと考えられます。対象を異にする多くの専門家の力を結集し、持続的な研究を通じて、その影響と回復過程を明らかにしていきます。

3. 震災に伴う沿岸域の物質循環プロセスの変化に関する研究 代表：永田 俊

三陸沿岸域への連続的な栄養塩の供給は、植物プランクトンを出発点とした食物連鎖を支え、豊かな海の幸をもたらしてきました。しかし、地震と津波による陸および沿岸地形の変化やそれに伴う淡水の流入パターン、あるいは海流の変化はこの栄養塩供給プロセスと食物連鎖構造に影響を与えたと考えられます。この影響の精密な解析を通じて、漁業資源の維持・再生メカニズムの解明を目指します。



4. 陸域由来の環境汚染物質の流入実態の解明 代表：小川 浩史

地震・津波による街の壊滅は、陸から海に注ぎこむ様々な物質の量や質を変えたと予想されます。また海に流された建築物などの一部は今でも沿岸底層域に留まり、そこから徐々に人工的な物質が流出している可能性があります。こうした環境汚染物質の存在と動態とを超高感度の検出技術で解明していきます。

5. 物理過程と生態系の統合モデル構築 代表：田中 潔

大槌湾の周辺海域は北西太平洋に位置づけられると同時に、津軽暖流水、親潮、黒潮が複雑に混合した海域となっています。そうした海流の動きは化学物質の攪拌や移動、ならびに生物過程に大きな影響を与えます。このため、これらの海流の動きを把握するとともに、その結果を生物情報と統合し、生態系モデルを構築していきます。

6. 集水域・河川・河口域・沿岸域における化学物質動態の解析 岩手大学に委託、代表：海田 輝之

沿岸域には陸由来の化学物質が流れ込み、それが沿岸域における植物の一次生産を支えるのみだけでなく、その場の生物過程に様々な影響を与えます。その影響は陸上生態系の特性や河川流量などを反映して変化します。三陸沿岸域の河川の基礎的な調査を通じて河川が沿岸生態系に及ぼす影響を明らかにしていきます。

7. 河口・汽水域及び沿岸域における河川水の混合拡散のモニタリングとそのモデル化 東京海洋大学に委託、代表：山崎 秀勝

河川水はその流量、温度、河口域や海底の構造などを反映しながら次第に海水と混合して外洋へと流出して行きます。その混合拡散を正確に見積もることは湾内での化学物質の動態やその生物生産への寄与を見積もる上で重要です。独自に開発された観測機器を駆使しながらその物理的プロセスを明確化し、モデル化します。

大槌レポート⑤

2011年3月に東日本大震災で被災した岩手県大槌町と、そこに立地する大気海洋研究所の附属施設である国際沿岸海洋研究センターの復興状況、周辺海域の調査結果を逐次報告します。

生物資源再生分野の新設

河村 知彦 国際沿岸海洋研究センター 教授

2012年4月、大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター（以下、沿岸センター）に新たな研究室「生物資源再生分野」が設置されました。

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波は、三陸・常磐沿岸域の人間社会のみならず、沿岸の海洋生態系、特に海底の生態系や生物群集に対して大きな攪乱をもたらしました。地震と津波によって海洋生態系が

どのような影響を受け、それが今後どのように変化していくかを明らかにすることは、崩壊した沿岸漁業を復興するために不可欠な過程です。これは同時に、私たち現代人が初めて目にする大規模な攪乱現象に対して、海洋生態系がどのように応答し回復していくかを解明する科学的に重要な課題でもあります。そのための調査、研究を実行することは我々日本の海洋研究者に課せられた責務です。

ルドとする研究者間のネットワークも構築してきました。沿岸センターは今回の津波で壊滅的な被害を受け、現在再建にむけての努力が行われている最中ですが、これまでの研究蓄積や研究者間のネットワークを基礎に、地震と津波が海洋生態系に及ぼした影響を解明し、漁業復興の基礎を築くための研究をリードすべき使命を負っています。東京大学では、その活動を支援するため、総長のリーダーシップの下に研究の核となるべき新たな研究室「生物資源再生分野」を設置したのです。

生物資源再生分野では今後10年間にわたって、大地震と大津波が沿岸の海洋生態系や生物資源に及ぼした影響、および攪乱を受けた生態系の二次遷移過程とそのメカニズムを解明します。また、その基礎となる生態系の構造や機能、各種生物の生態について精力的な研究を展開していきます。国際的海洋生態研究の拠点を形成することにより、東北沿岸地域の復興と発展に貢献したいと考えています。



「生物資源再生分野」立ち上げ時のメンバー。写真左から、中村慎太郎 (D2)、伯耆匠二 (D1)、河村知彦 (教授)、福田介人 (技術補佐員)、大土直哉 (D2)。2012年6月28日の潜水調査後、大槌漁港にて。

被災地の岩手県大槌町にある沿岸センターは、これまで長年にわたって大槌湾を中心とする東北沿岸域で海洋に関する様々な研究活動を行ってきました。また、全国共同利用・共同研究を推進し、東北沿岸を研究フィー

受賞

阿部 彩子 准教授 第32回(2012年)猿橋賞

受賞題目
「過去から将来の気候と氷床の変動メカニズムの研究」

後藤 龍太郎 氏(日本学術振興会特別研究員PD)
Zoological Science Award(日本動物学会論文賞)・
日本動物学会藤井賞

受賞論文
Morphological and ecological adaptation of *Basterotia* bivalves (Galeommatoidea: Sportellidae) to symbiotic association with burrowing echiuran worms.

中村 淳路 氏(大学院生)
日本地球惑星科学連2012年大会学生優秀発表賞
(地球人間圏科学セッション)

受賞題目
「宇宙線照射生成核種 Be-10・Al-26 の深度プロファイルを用いた湿潤地域における侵食速度の評価」

矢萩 拓也 氏(大学院生)
日本地球惑星科学連2012年大会学生優秀発表賞
(地球生命科学セッション)

受賞題目
「沖繩トラフと伊豆・小笠原諸島海域に分布するオハラエビ類の遺伝的集団構造」

鹿児島 涉悟 氏(大学院生)
日本地球惑星科学連2012年大会学生優秀発表賞
(固体地球科学セッション)

受賞題目
「中央海嶺からの硫黄、フッ素、塩素、臭素のフラックスの見積もり」

ハワイ大学との合同シンポジウム

井上 広滋 海洋生命科学部門／国際連携研究センター 准教授

2012年6月13～15日にUniversity of Hawaii and University of Tokyo Joint Symposium on Ocean, Coastal, and Atmospheric Sciences (海洋・沿岸・大気科学に関するハワイ大学・東京大学合同シンポジウム)が、ハワイ大学マノア校を主会場として開催されました。両大学の交流は、研究者および研究室のレベルでは古くから行われてきましたが、組織的な交流としては、1991年の海洋研究所とハワイ大学海洋・理工学部との部局間学術交流協定締結に始まり、その後、2004年からは大学間学術交流協定へと発展して、現在も活発な交流が行われています。今回のシンポジウムは、2008年3月に東京で開催された合同シンポジウムを受けて、ハワイで開催されたものです。東京でのシンポジウムでは、生物系の研究者の交流が主でしたが、今回は、大気海洋研究所の3つの研究系(気候システム、地球システム、生命システム)から、総勢25名の研究者(教員12名、ポスドク・学生13名)が参加し、ハワイ大学からそれぞれに対応する研究者や学生の参加を得て、大気海洋科学を網羅するシンポジウムとなりました。

シンポジウムの最初の2日間では、4つの口



熱のこもった口頭発表に聞き入るシンポジウム参加者

頭発表セッション(海洋・大気の相互作用と気候変動、海洋生物学と生態系立脚型管理、環境適応の生理学と微生物学、海洋動態と生物地球化学)と、ポスターセッションが実施されました。これらはすべて同一会場(マノア校のイーストウェストセンター)で全員参加のもとに行われたため、大学間の交流と研究分野間の交流が同時に行えるよい機会となりました。3日目の午前中には、それぞれの研究分野や研究グループに分かれての分科会が実施され、午後にはハワイ大学のSea Grant College

Programによる教育プログラムが実施されているハナウマ湾自然保護区を訪問しました。過剰な観光客の訪問により破壊が進んだ同湾の生態系を再生しつつ、教育の場として活用する取り組みは印象的なものでした。

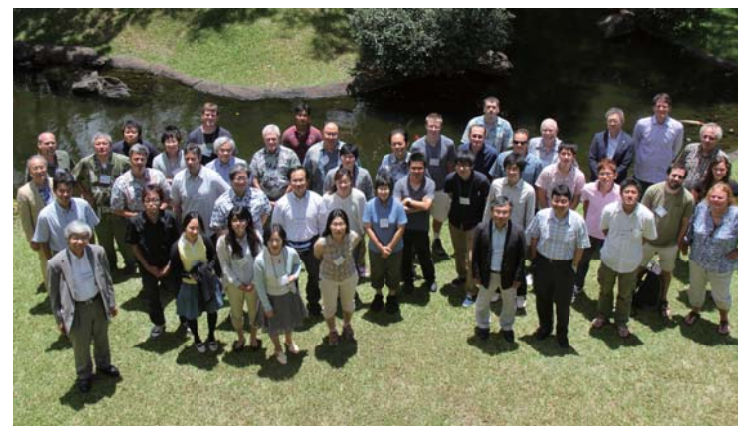
次回の合同シンポジウムは再び日本で開催される予定です。定期的な交流事業を通して、大学間の交流がより活発になり、研究成果が生まれることが期待されます。



海洋保護区ハナウマ湾はハワイ大学の海洋研究の場でもある



シンポジウム会場となったイーストウェストセンターのジェファーソンホール



イーストウェストセンター裏手の日本庭園で。背後の築山には、茶室が設けられている



ゆったりとデザインされたシンポジウム会場内部

A Message from Hawaii Univ. Darren T. Lerner, Ph.D. Associate Director Univ. of Hawaii Sea Grant College Program

By any measure the second Joint Symposium on Ocean, Coastal, and Atmospheric Sciences held on June 13-15, 2012 between the University of Hawai'i (UH) and University of Tokyo (UT) at UH in Honolulu, Hawaii USA was a tremendous success.

An opportunity to interact with old friends and make new friends, the symposium series, which was initiated to promote and support collaborative research among state-of-the-art research programs in the U.S. and Japan, provided the 60 participants with an invaluable opportunity to interact directly with their peers and learn about cutting-edge research conducted at their respective institutions. For the UH, this joint symposium series codifies and strengthens the cooperative exchange agreement currently in place and continually renewed since 1991 between the UH and UT and strengthens cooperation and partnership between the Atmosphere and Ocean Research Institute and the School of Ocean and Earth Science and Technology. The benefits for faculty, students and

our institutes are clearly demonstrated by the collaborative research and successful funding garnered since the first meeting held at the Ocean Research Institute in 2008 and continuing as a result of our most recent symposium. UH was proud to host this second symposium and we look forward to continuing the partnership, collegiality and collaboration with our sister institute in Japan.



ジョイントシンポジウムに参加して 金城 梓 海洋生命科学部門博士課程1年

今回ハワイ大学マノア校とのJoint Symposiumに参加させて頂いた率直な感想は「楽しかった」ということです。その理由は、学部時代を過ごした「第二の故郷」に里帰りできたということもありますが、それ以上に、自分の研究に対する姿勢に変化をもたらすこと

ができたのが大きな収穫でした。ハワイ大学でのシンポジウムは、ハワイらしく恰好も会話もカジュアルで気楽に議論できる一方で、その分研究の中身をかなり問われる印象を受けました。ポスター発表の後は、私の語学力だけでなく知識の不足さを痛感し、正直凹みました。ただ、他の研究者の方々の発表を



聞いているうちに、もっと研究を深め、足りない所を磨き、いつか私も壇上で自信を持って発表し、多くの方と有意義に議論できるようになりたい意欲が湧きました。そんなわけで、今回のシンポジウムは、自分を見つめ直し、喝を入れるのに絶好の機会となりました。



恒例の柏キャンパス一般公開に大気海洋研究所も参加します。

開催日時 10月26日(金)・27日(土) 10:00~16:30

「柏の海で学ぼう!遊ぼう!」をテーマに講演・展示・体験などの催しをとりそえてお待ちしております。こちらから情報をご確認ください。東京大学柏キャンパス 一般公開2012 http://www.kashiwa.u-tokyo.ac.jp/opc2012/index.html



大気海洋研究所 創立50周年記念行事

2013年1月30日(水)

2012年は大気海洋研究所の創立50周年にあたります。記念行事としてシンポジウムを開催し、現在編集中の『東京大学大気海洋研究所50年史』(書籍版・web版)を公開します。お楽しみに。

人事異動一覧

* H24.4~H24.7 *採用は新規のみ記載。ただし、特定有期⇄特定短時間有期の間の異動は新規以外の者も記載

Table with columns: 発令日, 氏名, 異動内容, 所属・新職名, 所属・旧職名. Includes sections for 教員(常勤), 職員(常勤), 特定有期雇用教職員, 特定短時間有期雇用教職員, 短時間有期雇用教職員, 外国人客員.

訂正 Ocean Breeze第8号p.13に掲載された、三條薫氏の所属・新職名が「事務部(東北マリンサイエンス)・特任専門職員」となりましたが、正しくは「事務部・特任専門職員」です。謹んで訂正します。

新スタッフ紹介

2011年7月と2012年4月に着任したスタッフを紹介します。①氏名・所属、②出身地、③趣味、④抱負などひとこと。



- ① 山本 光夫(海洋アライアンス連携分野 兼務特任准教授)
② 東京都
③ サッカー
④ 昨年度まで教養学部勤務していましたが、縁あって2012年度から大気海洋研究所でお世話になることになりました。藻場修復や沿岸環境に関する研究に従事しておりますので、大気海洋研で仕事をさせて頂けることになり、大変うれしく思っています。どうぞよろしくお願いたします。



- ① 瀧田 忠彦(事務長)
② 東京都
③ 街をブラッと散歩し気に入った店で好きなものを食べる(写真は、好きなものの一例です)、音楽鑑賞、スポーツ観戦など。
④ 何か縁を感じます。昨年度までの2年間、本部監査課長を在任し、沿岸センターには内部監査等で被災前と被災後に2回伺いました。今後は、本研究所、柏キャンパス発展のため、事務体力を向上させながら様々な課題に取り組んでいきたいと思ひます。海は大好きで鎌倉、茅ヶ崎、沖繩……、にたまたま行きます。ほとんど食べ歩きですが。



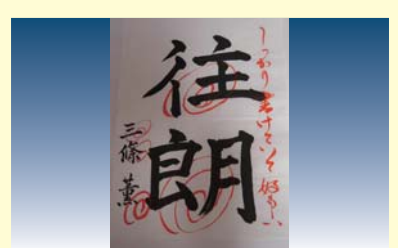
- ① 水津 知成(国際・研究推進チーム 係長)
② 東京都
③ 散歩
④ 東京大学医学部附属病院管理課研究支援チームから、2011年7月に着任いたしました。以前から船に興味があり、今年の5月には白鳳丸試験航海に乗船させて頂きました。深夜の揺れる船での作業、その厳しさの一部ですが実感できたことは貴重な思い出となりました。これからは皆様の少しでもお役にたてるように頑張りますので、よろしくお願いたします。



- ① 黒須 玲子(財務チーム主任)
② 千葉県
③ 旅行です。とくに北海道が自然も食べ物も気に入って40回以上行っています。
④ 昨年7月に本郷キャンパスから参りました。1年経ちましたがわからないことも多々ございますが、皆さまにご迷惑をおかけしないように頑張っていきたいと思ひます。どうぞ宜しくお願いします。



- ① 原 尚子(国際・研究推進チーム 一般職員)
② 千葉県柏市
③ ヨガ、旅行
④ 2011年7月にこちらに異動してからテレビの動物番組(とくに海関係)が気になるようになりました。業務では、微力ですが皆さまのお役に立てるよう迅速な対応を心がけたいと思ひます。写真は家によく来る猫です。



- ① 三條 薫(財務チーム 特任専門職員)
② 東京都文京区
③ 最近、精神修養のため書道を始めました。奥深い世界に感動中です。
④ 東大に勤務し約8年、駒場II~本郷~弥生キャンパスと渡り歩き、2012年4月に柏キャンパスに辿り着きました。環境良好・職住接近で、帰宅難民の不安からも解放され満足しています。新たな職務で皆様のお役に立てるよう努めて参りますので宜しくお願い致します。



- ① 小川 展弘(陸上研究推進室 技術職員)
② 岡山県浅口郡
③ 引っ越しかもしれませんが、免許証の裏面が更新され、ちょっと嬉しい。
④ 2012年4月に、陸上研究推進室に着任しました。こちらでは優秀な先輩方に支えられながら、顕微鏡施設を担当しています。若輩者ゆえ皆様にご迷惑を多々おかけするかとと思ひますが、なにとぞよろしくお願いたします。

■ 新入生歓迎会

2012年4月27日(金)に新入生歓迎会を開催しました。新入生歓迎会は毎年、新M2の学生が企画することになっています。主役である新入生を少しでも良い形で迎えらるるよう先輩方からアドバイスを頂きながら準備をしました。また、これは私たちM2にとっても、お互いに仲良くなる良い機会になりました。部門ごとの自己紹介ではジャグリングや歌唱などの一発芸が飛び出すなど、大変な盛り上がりでした。大気海洋研に所属する人たちのほぼ全員が集まる年に1度のイベントですので、新入生はもちろん参加者全員が楽しんで頂けたら幸いです。多くの方のご協力によって無事に開催することができました。ありがとうございました。(桂 将



当日は新入生を歓迎するため、多くの人で賑わいました

■ 白鳳丸一般公開

学術研究船白鳳丸の一般公開(下関市主催、海洋研究開発機構と大気海洋研究所が協力)が、2012年4月28日(土)、ドックのある山口県下関市のあるかぼーと岸



一般公開中の白鳳丸

壁にて開催され、共同利用共同研究推進センターのスタッフ9名が参加しました。白鳳丸の航海履歴や共同利用研究についての紹介、CTD、採水器システム、IKMT(プランクトンネット)などの観測機器および白鳳丸が世界で初めて採集したニホンウナギの卵の展示をおこないました。実際にウナギの卵を見た入場者の方にはとても喜んでいた

だき、たくさんの質問が出ました。一般公開入場者数は1,400名に達しました。

一般公開の翌日より、白鳳丸は1週間のテスト航海をおこない、次の航海への準備を進めました。

(森山 彰久)

■ 柏キャンパス in 駒場

2012年5月12日(土)、駒場の1年生を対象に、柏キャンパスの部局長が研究所の研究内容を紹介する「柏シンポジウム in 駒場」というイベントが行われました。

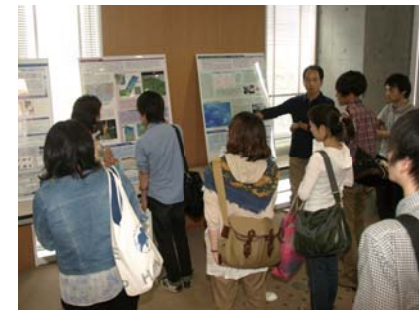
駒場の数理科学研究科大講堂で13:00から部局長による講演があり、Coffee Breakでは各部局を紹介するポスターセッションも行われました。講演では、新野所長が「ウナギの卵発見」「バイオロギング」「竜巻の発生機構」についてのお話をされ、ポスターセッションでは大気海洋研究所の研究を紹介しました。55名の学生が参加し、熱心に講演を聴いていました。すべての講演が理解しやすく工夫されていて、柏キャンパスの他の部局で行われている研究がよく分かりました。柏キャンパス内にいる人間にもこのような講演を聴く機会があればという感想を持ちました。(小畑 元)



駒場の学生に大気海洋研究所の研究内容を紹介します新野所長

■ 進学ガイダンス

2012年6月2日(土)午後1時から、大学院希望者を対象とした毎年恒例の進学ガイダンスが開催されました。最初に講堂にて研究所紹介、各部門の活動紹介、大学院入試案内を行ったあと、会場を会議室と講義室に移し、パネルを用いた研究室紹介となりました。終了後は各研究室の訪問タイムとなり、来所学生と所員の交流が続きました。今年は27の大学から59名の参加者があり、熱心な勧誘を受けていました。なおこのうち

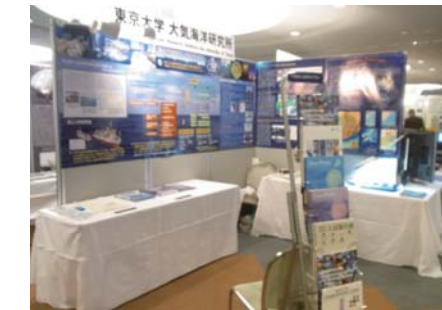


各分野の研究内容をパネルで紹介

19名は学部3年生以下で、来年度以降の入進学とはなりますが、早期に進路を検討している積極的な方々で見受けられました。来年度以降も4年生のみならずより若い方々に多数ご参加頂き、それが優秀な学生の入所につながればと思います。(狩野 泰則)

■ 「日本地球惑星科学連合 2012年大会」へのブース出展

2012年5月20日(日)～25日(金)に幕張メッセ国際会議場にて開催された日本地球惑星科学連合大会において、大気海洋



大気海洋研究所のブース全景

研究所のブースを出展しました。組織の紹介、進学案内、パネル・生物試料を用いた研究紹介、各種資料配布を行いました。今年度は角のブース位置を利用してパネル面を2面としたため、通路から見やすく、開放的なブースレイアウトとなりました(写真)。最も大きなスペースを費やしたのはニホンウナギの卵・レプトセファルス・仔魚の展示で、地球惑星科学の会合ということもあり、発見場所周辺の海底地形図、地磁気図を用いた地球科学的背景の説明も加えました。展示されたニホンウナギの卵に興味をひかれた人々が、卵発見に至る説明をうけながら、その他分野の研究にも興味をもってもらうという今回のシナリオ通りに多数の方に見てもらうことができました。

(芦 寿一郎)

AORI スタッフ日誌⑧

事務部 海洋アライアンス

大気海洋研究所には、教育研究活動を支援するさまざまな職種のスタッフが勤務しています。このコーナーでは、スタッフの仕事を通じて、研究所の活動を別の角度から紹介します。

海洋アライアンス(以下、機構)は、東京大学の「海洋の知を総合し、教育研究を行うための核」として、本学の「海」についての研究者 200 余名からなる分野横断型のバーチャルな組織です。機構長は生産技術研究所の浦環教授、大気海洋研究所からは木暮一啓教授と木村伸吾教授が副機構長として参画しています。いままでに「総合海洋基盤(日本財団)プログラム」(2008.4～)、「海洋学際教育プログラム」(2009.4～)、「平塚沖総合実験タワープログラム」(2009.7～)、「海洋リテラシープログラム」(2010.10～)を実施しており、大海研はそれらのプログラムの実行にあたって主な支援部局となっています。機構の運営は、外部資金で行われ、主な出

資元である日本財団からは 2008 年から助成を受けています。

機構の専任職員として、特任教員 9 名、職員 5 名が採用されており、大海研ほか 4 つの部局で機構の活動にあたっています。大澤(筆者)と北島は、大海研の機構事務担当職員です。わかりやすくいえば、研究室事務のような、また部局事務のような存在として、総務・経理全般を担当しています。具体的には、機構としての規則や文書管理、会議事務、予算管理、執行事務等のもと、機構が次々と新企画を打ち出しているイニシアティブ、ワークショップ、外国人講演会、シンポジウム、出前授業、イブニングセミナー、協賛・後援活動、書籍の出版、学術交流協定等を、そのたびに円滑に進むよう、大海研や本部の担当部署と相談しながら規則作りや予算配分、経理執行を進めています。なかでも難しいのは、東大ルールでは承認されることが、出資元のルール

では認められないことがときどきあることで、調整には苦心します。

“分野横断型”を謳っている当機構では、理系・文系を絡めた学際的な企画が重んじられるため、理系のみからなる研究所である大海研からの企画はやや少なくなっています。また、ほとんどのイベントは本郷キャンパスで開催されることもあって、私たちが柏キャンパスの大海研の教職員・学生との接触が少なく、今ひとつ覚えていただけないところがあります。しかし機構への研究者登録数は全部局中で大海研が最大です。機構を通じて大海研の方々の役にも立てるよう今後も努めていきたいと思っています。(大澤 悦子)

海洋アライアンスHP:
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>



シンポジウムの準備・受付を担当しています。海洋アライアンスシンポジウム・第7回東京大学の海研究「人と海のかかわりの将来像」会場にて



大気海洋研究所1階事務室のオフィスにて

今も昔も鳥漬けの日々です

Report ⑦

堤 理沙子/鳥海りさこ

漫画家

新領域創成科学研究科自然環境学専攻/
国際沿岸海洋研究センター
修士課程 2012年3月修了



私は現在、集英社の『りぼん』という雑誌で「つばめのすう」という漫画を連載しています。なぜか鳥の頭をした女子中学生が主人公のほのぼのした漫画で、単行本は1巻が出ています。

大気海洋研究所在籍時には、オオミズナギドリ(オオミズナギドリ)の繁殖期における採餌行動について、動物装着型小型ビデオカメラを鳥に背負わせて映像を撮り研究していました。海鳥の視点から得られた映像は、頭が鳥の漫画の主人公

のお話を考えるのにとっても参考になりました。実は、在学中からこの仕事をしていました。「鳥海りさこ」というペンネームも、海鳥の研究をしているから逆さまにして「鳥海」に、という具合につけたものです。プロフィール写真でも、海鳥を意識してペンギンの帽子をかぶってみました(写真右が私です)。

オオミズナギドリ(オオミズナギドリ)の調査は夏~秋にかけて行われるのですが、台風の時期とちょうど重なっており、調査地である無人島に予定通り渡れないことも多かったため、早めのスケジュールで原稿を進めたこともあります。単行本の発売日には、無人島でビデオを背負った鳥の帰りを待って悶々としつつも、お店に本が並ぶことを想像してどきどきしていたことを覚えています。そんな私を支えてくださった佐藤克文先生や研究室のみなさん、担

当編集者さんには本当に感謝しています。

私が漫画をかく時、やはり自分自身の体験したことが大きく影響しています。大気海洋研究所で学んだことや経験したことを自分なりに消化して作品の中に活かしてゆきたいです。がんばります！



海に行く話だったので、私が研究していたオオミズナギドリとツミネコを眺めるシーンを入れてみました。『りぼん』2012年8月号掲載原稿から(c)鳥海りさこ/集英社りぼんマスコットコミックス



「つばめのすう」第1巻表紙中身もだいたいこんな感じです。(c)鳥海りさこ/集英社りぼんマスコットコミックス

書き手自身による新刊紹介



海はめぐる 人と生命を支える海の科学

日本海洋学会 編
A5判・232頁・3360円(税込)
地人書館・2012年3月刊

日本海洋学会創立70周年を機に、同学会の教育問題研究会が中心となって作った一種の教科書です。大学初年次の学生程度の、初めて海洋学に触れる学生に大まかな概念をつかんでもらうことを意図しています。全12章、限られた分量のため個々の分野について深く掘り下げた内容とは言い難いものの、海洋物理、化学、生物といった分野に加え、法律や船など、海洋調査に携わる際に重要な分野もカバーし、実務者にも参考になる内容です。私は「法律」の章を担当しました。法律の専門家ではありませんが、長く海洋観測に従事した経験から、海洋調査・観測の現場で必要と思われる法令等の知識について整理しました。(道田 豊)

バイオロギング

「ペンギン目線」の動物行動学

内藤 靖彦・佐藤 克文・高橋 晃周・渡辺 佑基 共著
四六判・206頁・2310円(税込)
成山堂書店・2012年3月刊

バイオロギングとは、動物に小型の記録計を取付け、動物自身にデータをとってこさせる手法のこと。海洋動物を研究する人たちの間では、当たり前的手法になりつつあります。非専門家の人たちの間でも少しずつ知名度が上がってきたバイオロギングについて、それを立ち上げた内藤靖彦先生とその周りで盛り立てた創成期のメンバー(佐藤克文・高橋晃周・渡辺佑基)による解説本ができました。「はじめに」と「あとがき」を読んでいるだけでも、各自が全然違うことを考えてバイオロギングに関わっていたことがわかります。(佐藤 克文)



最新 水産ハンドブック

島 一雄・関 文威・前田 昌調・木村 伸吾ほか編
A5判・720頁・8925円(税込)
講談社・2012年6月刊

水産業界を取り巻く環境が大きく変化するなか、1988年に刊行された『改訂版 新水産ハンドブック』が最新の動向や科学的知見を組み入れて、全面改訂されました。水産関係全般に関して、実際の現場に対応した、より具体的で専門性の高い記述がなされているので、研究者のデスクサイドで活用できる内容となっています。また、本書は公務員試験対策用の参考書としても長年親しまれていることから、丁寧な用語解説に気が配られ、今回の改訂では図表の充実が図られています。(木村 伸吾)

